Bulletin of Kansai University of Nursing and Health Sciences. Vol. 16, No 1, pp.48-57, 2024

資料

母性看護学における学内実習の評価と今後の課題
―産後の母親の生活模擬体験からの分析―

The Evaluation and Future Challenge of the On-Campus Training in the Maternal Nursing Practice：Life-Simulated Experiences of Mothers After Giving Birth

小笠原百恵[1)]，永峰啓子[1)]，神谷映里[1)]，尾筋淑子[1)]，松村恵子[1)]
1）関西看護医療大学　母性看護学・助産学領域

Momoe Ogasawara，Keiko Nagamine，Eri Kamiya，Yoshiko Osuji，Keiko Matsumura
1）Kansai University of Nursing and Health Sciences，Region of Maternal Nursing & Maternal Nursing and Midwifery

要旨：2022年度の本学の母性看護学実習は新型コロナウィルス感染症拡大に伴い学内実習とした。学内実習の内容は，産褥期・新生児期の模擬事例を設定し，学生は母子一組を受け持つという設定での看護の展開を行った。この看護の展開を行うに先立ち，それぞれの自宅でモデル人形を世話しながらの生活をするという「産後の母親の生活模擬体験」を実施した。

学生は，「産後の母親の生活模擬体験」を通して“親役割獲得過程”とは育児技術に必要な手技の獲得だけではなく，親としての子どもに対する気遣いを常に持ち，自身の生活や環境を変化させることが含まれることに気づいていた。またモデル人形に対する様々な感情の変化を感じることで，“母子相互作用”の理解も深まったのではないかと考える。そしてこの体験から，母親へのサポートの必要性を実感し，対象者に対する看護師としての姿勢も身につけることにつながっていた。今後は「産後の母親の生活模擬体験」を客観的に評価し，学内実習としてより有効な実習内容の構築につなげていく必要がある。

キーワード：生活模擬体験，産後，母性看護学実習
Key Words：Life-Simulated Experience，Mothers After Giving Birth，Maternal Nursing Practice

Ⅰ．はじめに

新型コロナウィルス感染症の世界的な感染の拡大により，我が国においても2020年４月に緊急事態宣言が発令された。医療施設においては，感染者の対応に迫られるだけでなく，感染拡大を予防するために人の出入りが制限され，当然のことながら多くの実習施設において看護学生の受け入れが中止となる事態となった。このような状況を受けて，文部科学省・厚生労働省（2020）より，「新型コロナウィルス感染症発生に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について」が発出された。実習施設での実習時期を弾力的に取り扱っても差し支えないこと，年度をまたいでも差し支えないこと，実習施設での実習の代替が困難な場合には実習に代えて，演習や学内実習等を実施し，知識技術習得することについて差し支えないとするという内容の主旨であった（文部科学省・厚生労働省，2020）。こ

れを受け，多くの教育機関が母性看護学実習を学内実習で行うこととなったが（日本看護系大学協議会，2021），できる限り学習環境を臨床での実習に近づけるよう工夫がなされた（藤本・川崎・村上・上野，2022，pp.55-60；前山・青木・松沢，2022，pp.11-17；中田・櫻井・湯本・竹内，2022，pp.45-54）。

本学においても新型コロナウィルス感染症の拡大の影響は免れず，母性看護学実習は全て学内としたが，それに伴い実習内容の変更が必要となった。母性看護学実習は，母子の健康の意義や健康増進に向けた看護の役割を認識し，マタニティサイクルにある対象および家族へ必要な援助ができる基礎的実践能力の修得を目指す実習である。臨地で実習を行なっていた時には，産褥期・新生児期にある母子1組もしくは妊娠期にある母親を受け持ち，看護の展開を行うことで基礎的実践能力を修得していた。しかして全て学内での実習になったことで，臨地と同様に基礎的実践能力が修得できるように様々な工夫が必要となった。

本学でも褥婦および新生児の母子１組を受け持つという模擬事例を設定し，看護の展開ができる実習内容に変更したが，その看護の展開を始める前に，学生それぞれの自宅でモデル人形を世話しながら生活するという「産後の母親の生活模擬体験」を行う設定とした。本研究は，この「産後の母親の生活模擬体験」について評価し，今後の課題について検討する。

Ⅱ．母性看護学における学内実習について

１．実習目標

学内実習における実習目標は以下の通りである。

①妊婦・産婦・褥婦および新生児の特徴を理解し，根拠に基づいた看護過程を展開する

②実習における生活体験から家族や親子の愛着について考える

③生活者として対象を捉え，健康保持や増進のために行う支援について，その根拠や基本的な支援方法を考える

２．実習の概要

提示された模擬事例に対して看護の実践を行うという実習内容に設定した。看護の実践は，対象者に応じた健康教育の実施と振り返りまでを含むこととした。

実習時間は，９時30分～17時00分で，各クールの学生の人数は６～18人であった。

３．実習全体のスケジュールと内容

実習全体のスケジュールは表１に示す。実習第１日目は教員による学内オリエンテーションの後，産褥期および新生児期に必要な看護の演習を行った。演習では，各期に応じた全身観察の方法や，授乳への支援方法，新生児への看護（新生児の世話，感染防止と事故の防止）について，教員の説明やデモンストレーションの後，学生が各自で練習できるようにした。

実習第１日目～第３日目（午前）は「産後の母親の生活模擬体験」を実施し，第３日目の午後からは，模擬事例（産褥２日目・生後２日目までの情報）の看護展開を開始した。事例は３例用意し，学生を割り振った。学生は模擬事例を受け持ち，必要となる情報の収集，看護計画の立案，実施，評価の過程を行う設定とした。

実習第４日目はその事例の産褥２日目・生後２日目を受け持つという設定で，立案した看護計画を基に，産褥期・新生児期の医療モデルを使用し看護技術の実践を行った。看護技術を実践した後に，この日の事例の情報（産褥２日目・生後２日目）を配布した。

実習第５日目は前日（実習第４日目）の振り返りと，翌日（実習第６日目）に産褥３日目・生後３日目を受け持つための行動計画を立案する時間とした。

実習第６日目は行動計画を基に産褥３日目・生後３日目に看護技術を実践するという設定で演習を行い，演習終了後に事例の情報（産褥３日目・生後３日目）を配布した。学生は配布された情報を基に，母子の状態の理解を深め，必要となる健康教育の方向性を導き出した。

実習第７日目には，視聴覚教材を使用し，健康教育の実施方法を学んだ後に，受け持った事例に対して健康教育を実施するための計画立案を開始した。対象に応じた媒体の作成や物品準備も行い，実習第８日目には，２～３人のグループに分かれ，学生同士で実施者役，対象者役，観察者役になって健康教育のロールプレイを行った。ロールプレイ後に個人での振り返りやグループでの振り返り

を行い，デブリーフィングを行った。デブリーフィングは個人で行った後にグループ全体でも行なった。その後に，自分たちが行った健康教育について報告するという設定で，SBAR法でまとめた報告書を，個人およびグループで作成した。最終カンファレンスでは，グループで話し合った報告書を基に話し合い，学生全員が共有できるようにした。

表1

日	項目	内容
1	母親の生活体験	実習オリエンテーション、医療モデルを用いて援助の実施 ＊モデル人形を自宅に連れ帰る
2		モデル人形で、母親の生活体験の実施 ＊家での過ごし方や実施した育児技術での気づきについてオンラインで確認
3	母子と家族の看護過程展開	生活体験の発表、事例を提示しペーパーシミュレーション看護計画立案
4		この事例産褥2日目褥婦・生後2日目新生児の観察および援助の実施
5		母性看護技術の習得状況確認 同じ事例の産褥3日目褥婦・生後3日目新生児の看護計画立案
6		同じ事例の産褥3日目・生後3日目の観察および援助の実施
7	健康教育のシミュレーション	退院後の褥婦・新生児への援助(DVD視聴)、健康教育の保健指導立案
8		健康教育実施(学生間でロールプレイング)→デブリーフィング →SBARを用いてpresentation＆discussion
9		テーマカンファレンス(学内学修の統合)、記録の整理
10	まとめ	評価面接・今後の学修課題フィードバック

Ⅲ．「産後の母親の生活模擬体験」について

1．設定した背景

出産施設を退院した直後から，産後の母子および家族はライフスタイルを再構築できるように生活調整を進めることが必要となる（前原，2022, pp.367-377）。生活調整を進めるには，褥婦のセルフケア能力を高める看護が重要であり，その方法の一つとして育児動作による身体への影響や，子どもの安全を考えた生活環境の調整についての情報を提供すると母性看護学では教授している。

15年以上前から核家族化や少子化の影響によって，青年期にある男女は小さな子どもと生活を体験するという機会が非常に少ないため，子どもや子どものいる生活に対するイメージを持つことができにくいと指摘されている(内閣府, 2008)。よって現在の母親や父親になる世代に対して，子育てしながらの生活をイメージできるように情報提供や健康教育をより丁寧に行うことが重要な育児支援の一つになる。

一方で，このイメージを持ちにくいという状態は看護者自身にも当てはまる。看護者も同じような生育状況にある結果，看護者自身がイメージできないことから，十分な知識を持って育児支援を行うことが難しいことが予想される。よって看護基礎教育課程において，育児そのものや子どものいる生活について十分に理解し，学習しておくことは母子への看護を実践するうえで必要不可欠といえる。

新型コロナウィルス感染症拡大前に施設での実習を行うことができていた時は，学生は実際の出産（出生）直後の母子を受け持たせていただくことで産後の母親の経過や出生した子どもの経過，退院後の母子の生活について，学生自身の目や耳で情報を得ることができていた。また施設での実習では，出産（出生）直後から退院までの母親や子どもの生活に寄り添うことで，母子の状況を体感し学習できていたため，それぞれの母子に応じた支援につなげやすい状況にあった。しかし，新型コロナウィルス感染症拡大により，病院などの施設で実習ができず，事例の提示と学内でのモデル人形や医療モデルを使用した実習のみでは母子の生活の理解には限界が生じるのではないかと推測した。

そこで，学生自身が実際に母親の生活を体験することができれば，母子の生活の理解をより円滑に深めることができるのではないかと考え，「産後の母親の生活模擬体験」という実習を設定した。

2．「産後の母親の生活模擬体験」について

1）「産後の母親の生活模擬体験」の学修目標

学修目標は，「実習における生活体験から家族や親子の愛着について考える」である。細目は，以下の通りである。

① 実習における生活体験から親役割獲得過程について説明できる

② 実習における生活体験から愛着や母子相互作用に関する学びについて具体的に記述できる

2）実習方法

（1）スケジュール

実習第１日目（実習初日のオリエンテーション終了後）は前述した演習を行い，新生児の世話のための看護技術の手技の確認を行い，練習を行った。

実習第２日目は，学生は自宅でモデル人形に対して育児技術の実践を行った。教員はGoogle Meetを用いてどのような生活をして

いるのかの確認を行った。学生は各自の体験について記録用紙に記入した。

実習第３日目は，５～６人のグループに分かれて各自の体験や学びを共有した。グループ内で発表された内容は，全体カンファレンスで発表され，学生全員がお互いの体験を共有できるようにした。

（２）「産後の母親の生活模擬体験」の記録用紙

「産後の母親の生活模擬体験」の記録のみを記載する記録冊子を作成した。最初に自分の設定を書く「新生児との生活体験の設定」の欄を設け，記入を促した。実家暮らしの場合には里帰りの設定にする（サポートの有無の設定は自由），一人暮らしの場合には夫が日中は外で仕事，夜の帰宅が遅い設定にする（一人で全てをしなければならない家庭）など，学生自身の生活に応じて自分で考えるように指導した。

次に，１日の時間軸に沿って行ったことを書く「新生児との生活体験の行動計画・実施記録」の欄を作成し，行った時間やその内容，評価を書けるようにした（図１）。沐浴，おむつ交換，更衣，添い寝，新生児を寝かせる環境，授乳の６場面それぞれについて，「実施から感じたこと，考えたこと」，「グループメンバーからの学び」という欄を設けた（図２）。前者には，自分が行ってみて難しいと感じたことや工夫して効果があったことなど生活体験を通して気づいたこと，学んだことなどについて具体的に体験内容を記入するように指導した。後者には，グループ内や全体のカンファレンス等を通して他の学生の意見などを聞いたうえで，新たな学びや自分の課題として考えた内容を記入するように指導した。

冊子の最後には，生活体験を通しての学びを書く用紙を設定し，育児にふさわしい居住環境や，家事や育児のサポートとなる社会資源，夫やその他家族（実母・実姉妹など）のサポート，生活全体についての看護の必要性や生活を通しての学びを整理できるようにし，事例を受け持つ際に情報収集の視点を広げ，個別性のある健康教育が実施できるように設定した。

図1

新生児との生活体験の設定

新生児との生活体験を実施するにあたり自分の設定（必ず母親）を詳しく書いてください

新生児との生活体験の行動計画・実施記録

計画		実施　評価
	8時	
	10時	
	12時	
	14時	
	16時	
	18時	
	20時	
	22時	
	0時	
	2時	
	4時	
	6時	
	8時	

図2

生活状況の記録および学び

沐浴で工夫したことおよび実施から感じたこと、考えたこと

グループメンバーからの学び

オムツ交換で工夫したことおよび実施から感じたこと、考えたこと

グループメンバーからの学び

（３）実習内容

実習第１日目は，教員によるデモンストレーションの後，学生はモデル人形を用いて育児に必要な看護技術の演習を行い，自宅での生活に備えた。必要に応じて，教員は手技の確認や指導を行なった。特に授乳については，授乳枕などを用いて授乳姿勢をとり（男子学生は乳房モデルを装着して），母親の立場になって，適切な授乳姿勢がどのような状態であるのかの確認を学生一人ひとりが行った。沐浴は，沐浴槽を使用した方法を練習したのち，ベビーバスを床に置いて行うという家庭での設定でも行った。教員は，自宅のどこで沐浴するのか，自宅で沐浴する際の準備やサポートなど具体的にどうするかについて学生自身が考えるように口頭で促した。実習第１日目の自宅での育児体験は，自己学習として時間を調整しながら行うことを前提とするものの，自宅に帰ってすぐに新生児を寝かせる環境を整えること，できるかぎり3時間おきにはおむつ交換・授乳を行うこと，沐浴もできる限り行うことを設定として伝えた。夜間などの過ごし方も自己の学習状況に応じて調整するように伝え，育児技術を実施する以外の時間は，休憩などが確保できるように配慮した。モデル人形を連れ帰る際には，バスタオル１枚，短肌着２枚，長肌着１枚，ベビードレス１枚，紙おむつ４枚，おしりふき１袋も持ち帰り，自宅ですぐに使用できるようにした。

実習第２日目は，学生が前日から引き続き子どもの世話を行っているという設定にした。実習の時間内の10時，13時，16時は，授乳の時間と設定し，教員はGoogle Meetを用いて授乳を行っているかを確認した。Google Meet開始時には授乳できる状況かどうか母子の状態を確認するように教員が伝え，学生は各自で準備を整えた後に授乳を開始した。左右の乳房を15分ずつ授乳するという設定とし，その間の30分間はGoogle Meetをつないだままにして（画面は停止し，音声だけをつないで），教員は口頭で学生とやり取りを行いながら，授乳の状況を確認した。今どのような抱き方や姿勢で行っているか，クッションなど使用している場合にはどのような大きさや硬さのものをどこに使用しているのか，姿勢を不安定に感じないか，体に痛みなど感じないか，授乳をするために肌を露出する環境として適切か（プライバシーの保護も含む），児の保温や安全を保つことができているかなど，具体的な手足の使い方や物の使い方などを教員が詳細に学生に問いかけて確認し，学生がお互いの状況を共有できるようにした。

また授乳以外についても，新生児の寝かせ方や，清潔ケアの具体的な方法など，どのような状態（状況）で行ったのかについても，３回の授乳時間の中で教員が口頭で質問した。学生の生活状況や育児技術の具体的な内容だけでなく，学生自身が自分の行っていることをどのように分析したかも確認し，お互いの体験や学びを共有できるようにした。

実習第３日目は登学し，各自の具体的な体験（沐浴，おむつ交換，更衣，添い寝，新生児を寝かせる環境，授乳）について，どのような内容や方法であったのかをグループ内で発表し合い，学生達がお互いの体験を共有できるように設定した。体験を共有した後に，「産後の母親の生活模擬体験」を通してどのような気づきや学びがあったのかをテーマに，全体でカンファレンスを行った。

３）「産後の母親の生活模擬体験」の評価基準

学修目標の細目について，５点満点で評価することとした。以下に項目毎の評価の視点について示す。

① 実習における生活体験から親役割獲得過程について説明できる

自身の体験を基に，指定された育児技術（沐浴，おむつ交換，更衣，新生児を寝かせる場所・寝かせ方，添い寝，授乳）の場面について具体的に説明できるだけでなく，“親役割獲得過程”という用語を用いて，その現象についての自身の考えが文章化できる状態を５点として設定した。

② 実習における生活体験から愛着や母子相互作用に関する学びについて具体的に記述できる

自身の体験を基に，指定された育児技術（沐浴，おむつ交換，更衣，新生児を寝かせる場所・寝かせ方，添い寝，授乳）の場面を通して，母子の関係性や母親の心理状態について具体的に説明でき，“愛着”や“母子相互作用”という用語を用いてその現象についての自身の考えが文章化できることを５点として設定した。

Ⅳ．倫理的配慮

本研究は，学生の実習記録やカンファレンスの議事録を分析対象にしておらず，教員が確認できた学生の反応のみを記述し，分析に用いている。また，学生の反応の表現においては，学生の性別や実習時期，担当した事例，詳細な自宅の状況や居住地，家族背景は示さず，個人の特定ができないように配慮した。

Ⅴ．結果

学生の反応を以下の項目に分けて示す。

１．家事，育児の両立の難しさや自分の生活への影響

学生は,「あっという間に一日が終わった。」や,「おむつを替えたり，授乳をしたり，色々していたらいつの間にか時間が経っていて，気づいたら何もできなかった。」など述べていた。また，一人で育児をするという設定の学生は,「ご飯は作り置きをしていたから三食何とか食べることができた。毎回作るのは無理かもしれない。」,「実際にあかちゃんの着替えを何回かしたら，いつもよりも洗濯することが増えるのだろうなと思った。」など忙しさを感じていた。

自分の家での行動においては,「離れてはいけないと思ったから，隣の部屋に行ったり，トイレに行ったりするときもドアは開けておいてあかちゃんの様子を気にしながら用事を済ませないといけなかったので凄く疲れた。」など，常に子どものことを意識することの大変さも訴えていた。

２．育児で生じる身体的な影響

「お風呂にいれている間，中腰になって常に腰が痛かった。」,「授乳を何回もしたので肩が凝った。」,「背もたれがある方が授乳は楽だった。」,「添い寝をしようと思ったが，狭くて窮屈だし，あかちゃんを下敷きにしないか不安でゆっくり昼寝もできなかった。一緒に寝ていても疲れが取れないことがわかった。」,「床に敷いた布団の上に寝かせた状態でおむつを替えると腰が痛くてしんどかった。」,「ベッドの上など少し高いところに寝かせて，自分は立膝になってすると少し楽だった。」,「どこであかちゃんを寝かせてお世話をすれば一番しんどくないか考えて，色々試した。それでもいつもしない動きをするので筋肉痛になった。」といった発言があった。学生は様々な場面を通して，育児で生じる身体的な苦痛や疲労感が蓄積することを実感していた。

３．子どもにとって適切な環境づくりの実際

「大人用のベッドで一緒に寝ることを考えた場合に，壁との隙間に落ちないか心配になったので，隙間を埋めるように布団を折りたたんで挟み込んだが，なかなかうまくいかなかった。」,「床に布団を敷いて寝かせていたが，床が冷たく布団の下にカーペットを敷いていても寒いことがわかった。」,「今の家には保温のために使えるものがないことがわかった。」,「枕元のコンセントでいつも携帯電話を充電していたが，コードが絡まりそうで危なかったので，全部抜いた。」,「本棚が倒れてきたり，机の上に置いているものが落ちてきたときのことを考えると，どこに寝かせたらよいのか難しく，何度も確認してゆっくり眠ることができなかった。」,「寒かったのでエアコンを入れたが，風が当たらないようにベッド自体の向きを変えたりして，大変だった。」,「ハサミやペンといった文房具類でさえ危険であるとわかり，それを毎回片づけなければならずとても大変だった。」,「ペットを飼っているが，部屋に入らないように柵をしたが，なかなか思い通りにできず侵入を防げなかった。」,「ペットがあかちゃんに興味を示してしまい，離すのが大変だった。」,「ペットが警戒して吠えて大変だった。」などの発言があった。今の自分の生活環境では十分に子どもの安全が確保できないこと，子どもにとって適切な環境を整えるために色々と工夫しなければならないことに気づいていた。また環境を変えることは簡単なことではなく，いかに時間や手間がかかる大変な作業であるのかについても気づいていた。

4．モデル人形に対する感情の変化や育児によって生じる感情

模擬体験が終了した時に，「もう終わりなんて残念です・・・。」「どうなるかと思ったけど，いなくなると寂しいです。」，「最初はあまり何も思わなかったけど日に日に大事に思えた。」，「返したくないです。」，「自分の子どもの頃の服があったので似合うと思って途中から着せてあげた。」，というモデル人形を肯定的にとらえ，受け入れるような発言があった。

逆に「ああ，やっと一人の生活に戻ることができる。」，「解放された。」という育児に否定的な感情も感じていた。

5．母親に必要となる看護の理解

1）サポートの必要性

家族と同居している学生の場合は，実父母などからのサポートがある育児という設定にし，一人暮らしの場合では母親一人で育児をするという“ひとり親”世帯などに設定していた。サポートがなかった学生は「一人であれもこれも用意するのに時間がかかり，沐浴を終えるのに時間がかかった。」，「おむつを替え始めて，おしりふきがないのに気づいて取りに行くなど何回かあって，誰かに取って来てもらうだけでも助かることがわかった。」，「あかちゃんのことと，自分のことを一人で全部ずっとするのは無理だと思った。」など，一人で育児を行う時間が長いほど大変であることに気づいていた。逆に「自分の母親が一緒にお風呂に入れてくれることで学校での演習よりも素早くできたと思う。」，「やり方があっているのかわからなかった時に（自分の母親が），こうするといいよと一緒にしてくれたから，助かった。」，「食事や洗濯など自分のことをしなくてもよかったので，子どもの世話に集中できた。」，「（ずっと泣いている設定で授乳と授乳の間もあやすことにしたが）一人で抱っこするのではなく，家族と交代で抱っこすることで少し楽だった。」，「一緒にみてくれる人がいるだけで安心だった。」など，サポートしてもらうことで子どもの安全につながるだけでなく，時間短縮や負担の減少につながり，結果的に身体的な疲労も少なくて済むのではないかということに気づいていた。さらに適切なサポートが得られることが心理的な支えになることにも気づいていた。

2）看護者としての姿勢

実習第８日目の母親に対する健康教育の実施場面で母親役の学生に対して「頑張っておられますね。」，「おむつ交換を上手に行っておられますね。」など現在の母親の育児を保証していた。また「無理なく家でできそうですか？」，「誰かにお願いしてもいいですが，お願いできそうな人はいますか？」，「しんどくなったら誰かに頼んで休めそうですか？」といった母親の生活環境や家族などのサポート状況，母親の気持ちを確認しながら，話を進めていた。一つ一つの育児技術についてどこで誰がするのかということを確認する様子も見られた。

Ⅵ．考察

1．“親役割獲得過程”，“母子相互作用”の理解について

「産後の母親の生活模擬体験」を経験した学生の発言から，家事，育児の両立の難しさや自分の生活の制限，育児で生じる身体的な負担を感じていることが明らかになった。そして子どもにとって適切な環境づくりを自分の生活環境に置き換えて行うことで，いかにそれが難しいのか，常にどれだけ気を配らなければならないのか，自分の生活もままならないことも実感していた。学生は，産後の母親と同じような身体的な苦痛や疲労の蓄積，生活の制約を実感しながらも，自宅で様々な工夫をして育児技術を実施することで，実践的な育児技術を体得できたと考える。“親役割獲得過程”は単なる育児技術の獲得ではなく，常に子どもへの心遣いが必要であること，子どものために生活環境自体をも変える必要があるということの理解にもつながったのではないかと考える。

モデル人形に対して肯定的な感情や否定的な感情を持つという感情の変化も，学生に生じることが明らかになった。初産婦は産後１か月の間に，子どもに対して肯定的な感情と否定的な感情を持つと報告されている（デッカー・松下，2022，pp.51-61）。今回の結果から，学生は実際の初産婦と同様な心理的な体験をしていると考えられる。実際の母親は，手掌を通した母親の感覚（五

感)に訴える刺激で，わが子への理解を深め，子どもとの関係性を高めていくとも報告されている（原・浅田・内山・久木原，2013，pp.20-29)。今回はモデル人形であるため，子どもからの反応はほとんど得られない状況であるが，実際に手で触れ世話をすることで，モデル人形を子どもに見立てて関係性を深めた結果，学生は肯定的な感情が高まっていったのではないかと考える。

同時に学生たちはモデル人形の世話をするということで，否定的な感情も持っていた。先行研究で，モデル人形に対して育児を行うことで，育児技術を獲得し，肯定的な感情を高めるだけではなく，戸惑いや困難感を持つことが報告されている（小倉・谷口・角谷・加藤，2016，pp.29-36；田村・岡本，2014，pp. 97-101)。本学の学生も同様に否定的な感情を持ったのは，それだけ母親と同じように育児に向き合うことで生活の実際を理解できた結果ではないかと考える。学生たちはモデル人形や育児に対する様々な感情の変化を体験しながら，“母子相互作用”についての理解を深めたのではないかと考える。

２．母親に必要となる看護の理解と看護者の姿勢の獲得

家族と同居している学生の場合は，実父母などからのサポートがある設定とし，一人暮らしの場合では母親一人のみで育児をするという設定としていた。サポートがなかった学生はどんな困難があったか，サポートがあった学生はどんなサポートがあって，どう助かったのかを具体的に述べていたことから，サポートがあることがいかに母親にとって重要であるのかという理解につながったことが明らかになった。産後１か月の母親は，授乳が難しい，児の世話が難しいという思いを抱えており（美濃口，2023，pp.1-8)，特に初産婦の方が経産婦よりも育児困難感が高くなるとされている（神崎，2014，pp.176-188)。また母親が夫の家事や育児に満足感が高いほど，母親の不安・抑うつが低くなり，外部からのサポートがあるほど育児上の問題も低下することも先行研究で示されている（神崎，2014，pp.176-188)。学生たちはモデル人形でさえ，様々な場面において一人ですべてを担うことの難しさ,大変さを感じていた。逆にそこで家族からのサポートが得られることで身体的な負担が軽減するだけでなく，心理的な負担も軽減できるといった経験もしていた。つまり実際の母親，特に初産婦に近い状態に置かれる経験ができたことで，サポートが得られることがいかに重要であるか実感できたのではないかと考える。

最後に今回の体験を通して学生は，看護者としての姿勢を身につけることも明らかになった。健康教育を実施する場面で看護者役の学生は，母親の状況や気持ちを適宜確認しながら話を進めていた。母親に一方的に伝えるのではなく，相手の気持ちや状況を気遣いながら，一緒に方法を模索していくような声かけが随所に見られた。岡田・山口・泉澤は（2017，pp.13-19)，看護学生は看護対象者の姿を目の当たりにすることで，対象者の苦痛にきづき，向社会的行動をとるようになると述べている。今回の実習では，学生は実際に対象者を受け持つことができず，直接的な状態を目の当たりにはできていないものの母親を労わることが自然にできていた。これは「産後の母親の生活模擬体験」を通して学生が，育児中の母親の心身の状態を理解し，実感できたことで，実際の母親の姿を目の当たりにする状況に近い状態となり，母親に対して思いやりを持つことができ，寄り添う姿勢を持つことができたからではないかと考える。

３．看護基礎教育課程における「産後の母親の生活模擬体験」の重要性

新型コロナウィルス感染拡大によって母子をとりまく環境は大きく変わった。出産前後の入院生活では様々なことが制限され，夫の面会だけでなく，分娩時の立会いまでもが制限されることで，母親の心理状態への影響が生じた（佐々木･近澤･笹野・間中・竹，2023，pp.65-77)。同時に夫が親としての役割を獲得していく過程にも大きな影響をもたらすことになった（東條・伊藤，2023，pp.29-35；吉川・塩川・原・高野・周藤・石本，2022，p.119)。未だその影響は残っており，今後ますます親役割獲得を促す丁寧な支援が必要不可欠となる。今回のような「産後の母親の生活模擬体験」といった看護の対象者を体験するという学習を積極的に取り入れることは，母性看護学においてより実践的な育児支援の能力を養うことにつ

ながるのではないかと考える。

Ⅶ．評価

今回の「産後の母親の生活模擬体験」を通して，学生の言動から，育児技術の具体的な場面を説明できていたと考える。“親役割獲得過程”という用語を用いてその現象について自身の考えが文章化できたかは，実習記録を分析していないため評価できないが，“親役割獲得過程”とは単なる手技の獲得ではなく，親として子どもに対する気遣いができるようになり，必要に応じて自身の生活や環境も変えていくという要素があることも気づいていたといえる。よって，今回の体験によって学生は，“親役割獲得過程”についての学びは深まったと考える。

また学生は，モデル人形に対しての様々な感情やその変化を感じていた。こちらも文章化については評価できないものの，その心理的な体験から，子どもとの関わりを通して母親が様々な感情を抱きながら子どもとの関係性を深めていくことも実感したのではないかと考える。よって学生は，このような母親の子どもに対する感情を知ることで，“母子相互作用”についての理解が深まったのではないかと考える。

加えて，学生は母親へのサポートの必要性の理解し，看護者としての母親に対する姿勢を身につけることにもつながっていた。よって，「産後の母親の生活模擬体験」は，母性看護学実習における学修目標達成につながる内容であるとともに，本来想定していた目標以上の達成が期待できるものであったと考える。

Ⅷ．今後の課題

今回は，学内実習の状況の報告であり，教員が得ることのできた学生の反応の記述のみであるため，客観的な効果の検証までは至っていない。今後は，客観的な指標を用いて「産後の母親の生活模擬体験」の効果を検証することや，実際の臨地場面などの環境を擬似的に作り，学修者が実際に臨地で経験することを，シミュレーションを通じて学ぶ教育による構造的な学修プログラムを検討することで，学内での実習としてより有効な実習内容につながるのではないかと考える。

また「産後の母親の生活模擬体験」によって学生は，母親についての理解を深めたものの，モデル人形は泣くこともなく，実際の子どもの状態の理解や“愛着”についての理解は限界があったといえる。よって，学内であってもより母子それぞれの理解が深まるような内容も検討していく必要がある。

Ⅸ．おわりに

「産後の母親の生活模擬体験」は，学修目標到達への効果が高いだけでなく，当初の設定より多くの効果があることも示唆された。少子化により母性看護学実習の実習場所確保が困難になることから考えると，今回のような模擬体験は，看護対象である母親を理解するための実践能力を培う有効な方法ではないかと考える。よって今後は，客観的な評価を行い，より効果的な実習内容の構築につなげていく必要がある。

利益相反

本研究において，開示すべき利益相反は存在しない。

【文献】

デッカー清美，松下年子（2022）．妊娠期から産後１ヵ月未満の母親の子どもや夫に対する情緒的体験　初産婦へのインタビュー調査．アディクション看護，19(1)，51-60.

原理恵，浅田有希，内山久美，久木原博子（2013）．タッチケアが母子相互作用に及ぼす効果．看護・保健科学研究誌，14(1)，20-29.

藤本紗央里，川崎裕美，村上真理，上野陽子(2022)．新型コロナウィルス感染流行下における母性看護オンライン訪問実習の効果検証　－オンライン相談支援実用化の可能性と課題－．日本職業・災害医学会会誌，71(2)，55-60.

神崎光子（2014）．産後１ヵ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題，家族機能との因果的関連．女性心身医学，19(2)，176-188.

前原邦江（2022）．第６章　産褥期における看護D施設退院後の看護．系統看護学講座　専門分野　母性看護学各論　母性看護学２（pp.367-377）．東京：医学書院.

前山直美，青木真希子，松沢祐子（2022）．COVID-19下における母性看護学実習形態変更

による学生の学び．神奈川工科大学研究報告 A-26　人文社会科学篇．46，11-17.
美濃口真由美（2023）．産後１ヵ月の初産婦の育児困難感の特徴．秀明大学看護学部紀要，5（1），1-8.
文部科学省･厚生労働省（2020）．新型コロナウィルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校，養成所及び養成施設等の対応について．
Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/content/000636144.pdf（参照2023年８月28日）
内閣府（2008）第３章　生命の大切さ，家庭の役割等についての理解　第1節　乳幼児とふれあう機会の充実等を図る．平成20年版　少子化社会白書.
Retrieved from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2008/20webhonpen/html/i2311000.html（参照2023年８月28日）
中田覚子，櫻井綾香，湯本敦子，竹内良美（2022）．COVID－19禍における母性看護学実習の代替実習の有用性と課題．佐久大学看護研究雑誌．14(1)，45-54.
日本看護系大学協議会（2021）．2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書.
Retrieved from covid-19cyousaAB.pdf（janpu.or.jp）（参照：2023年８月28日）
小倉由紀子，谷口美智子，角谷あゆみ，加藤泉（2016）.「泣き」に対する看護大学生の反応に関する一考察　－「マイベビー３」を用いた男女の比較－．中京学院大学看護学部紀要，6(1)，29-36.
岡田郁子，山口さつき，泉澤真紀（2017）．基礎看護学実習Ⅰ実施前後における看護大学１年生の向社会的行動の変化．旭川大学保健福祉学部研究紀要，9，13-19.
佐々木綾子，近澤幸，笹野奈菜，間中麻衣子，竹明美（2023）．日本の新型コロナウイルス感染症流行下における分娩への影響に関する文献研究．大阪医科薬科大学看護研究雑誌，3，65-77.
田村美子，岡本次枝（2014）．小児看護におけるシミュレーション教育　－赤ちゃん人形導入の試み―．インターナショナル Nursing Care Research，13(1)，97-101.
東條結衣，伊藤貴代（2023）．COVID-19禍でのNICUにおける愛着形成とパートナーシップに向けた動画視聴の効果．徳島市民病院医学雑誌，37，29-35.
吉川景子，塩川加緒理，原幸子，高野養子，周藤葵，石本泰子（2022）．第２子以降の児に対する父親の愛着形成についての一考察　コロナ禍にあり面会制限や立ち会い分娩ができなかったことによる影響．島根医学，42(1)，119.